

総合学習

山岸 朋子 橋本 俊彦 金岡 弘宣
上田 雅人 谷本 克典 八崎 和美
橋田真由美 今井 直人

1 総合学習における知識創造とは

これまでの
総合学習のあゆみ

「環境」「人間」「国際
理解」「英語」「情報」

めざす子どもの姿

本校の
総合学習のスタンス

主体的・協同的

総合学習における
知識創造

本校が総合的な学習に取り組み始めたのは平成7年度であり、翌8年度からは「総合学習」と称して実践と研究を重ねてきた。当初は「総合学習」を「教科の枠を越え、「今日的課題性のあるテーマを設定し、体験活動を通すことで、社会の変化に対応できる力や態度を育成すること」と捉え、「環境」「人間」「国際理解」の3つの視点で実践を重ねてきた。その後、「英語・英語活動」「情報教育」の2分野を加え、これらの活動も、この総合学習の時間枠に位置づけることにした。

しかしながら、「テーマ設定型総合」であるがゆえ、教師主導の傾向になりがちで、必ずしもこの実態に依拠していないのではないかという問題点も生まれてきた。そこで、平成14年度より、従来の視点を大切にしながら、総合学習でしかできない内容や、方法、および総合学習で扱うべき素材や活動を考慮し、学年・学級単位で進めていくことにした。これまでの教師主導のテーマ型設定総合学習からの脱却を図るために、めざす子どもの姿を設定し「共に生きる社会や環境に自らかかわりよりよい生き方を求めようとする姿」と考え、今日的課題にかかわる視点で事象を捉え、その視点にかかわっての価値観の形成を目指していくことにした。そして、その価値観を形成していく過程の中で問題解決に必要な資質・能力や学び方を獲得していくことを大切にしてきた。このような学びを通して、「共に生きる」という理念をもとに自分を取り巻く「ひと・もの・こと」とかかわりながら「生涯にわたって学び続けようとする」素地を築いていくことを大切にしてきた。

近年の環境問題の悪化、情報化社会の進展など様々な課題が産出してきている。このような時代を生き抜く子どもには、「生涯にわたって学び続けようとする力」と同時に「主体的協同的に様々な問題に立ち向かい、その解決を図る力」を育てていくべきである。自力で個人や社会にかかわる問題を解決することも必要であるが、今後直面するであろう課題の解決には個人では限界がある。

「主体的・協同的」という学習状況を構築するのにはもう一つの側面がある。近年、対人関係能力の欠如によって引き起こされる様々な社会問題が起こっているが、他者との上手な相互交渉の仕方というのは生まれつき身に付いているわけではなく、仲間と力を合わせて一つのことをなし遂げたり、情報を集め協力し合って活動するという社会的技能は、教えられなくてはならない。そのため有効な機会が「協同」という学習状況である。授業は多くの要素で構成されているので、協同的な探究になじみにくい単元は一斉指導や個別指導で教えるが、子どもの主体的な活動を刺激する探究的な内容領域を扱う場合、ことに総合学習ではこのような学習状況が必要である。

以上のことをふまえ、総合学習での知識創造を以下のように定義する

自ら課題を見つけ 解決の方法を考え その結果を学び取っていく営み

2 総合学習における「かかわり」の活性化とは

グループ・プロジェクト

総合学習における
「かかわり」

子どもがグループになって話し合い、自分たちが学ぶテーマについて検討を加え、実際に体験し、理解を深めていく学習状況をグループ・プロジェクトという。

総合学習における「かかわり」の活性化とは、グループ・プロジェクトで一人一人の知を出し合い、共通の課題を解決しようとする状態ととらえる。グループ学習を充実させることは個の追求活動を充実させることにもつながる。

3 「かかわり」を活性化するために

課題を解決するスキル

*1 村川雅広編
確かな学力としての
学びのスキル 主体
的・協同的問題解決ス
キル
日本文教出版 2004
年

総合学習のグループ・プロジェクトにおいて、課題を解決するために育てていくべきスキル^{*1}を想定する。そのスキルをつけるための手だてが「かかわり」を活性化すると考える。

- ①身近な「ひと・もの・こと」にかかわろうとする意欲を持つ
- ②問題を見出す。
- ③問題を整理し、その関係性・重要性を推し量り、取り組むべき課題を決定し、具体的な探究計画を立てる。
- ④実験や観察、インタビューやアンケート調査、図書資料やインターネットの検索などの多様な方法を用いて発信・表現する。
- ⑤取り組んでいる内容や方法、進行状況についての評価・改善を行い、次の学習見通しを立てる。
- ⑥一連の学習の成果を整理し、相手の立場や理解の程度を考慮し、適切な方法を用いて発信・表現する。
- ⑦学習活動全体を多面的にふりかえり、課題の取り組み方、発信・表現の方法等について評価するとともに、取り組んだ課題について自分の考えがどう変容してきたのか、その課題について今後どのようにかかわり、取り組んでいくのかを考える。

以上のスキルである。これらのスキルを意識し以下の手だてを考えてみる。

(1) 活動の見通しを持たせる

タイムスケジュールを
立てる
ゴールを意識する

グループの一人一人が活動のゴールを意識し、ゴールへ至るまでの活動を想定し、グループ員で共有する。何を、いつまでにどのような形で仕上げればいいのかを共通理解することがグループ活動の基本であると考ええる。

(2) 活動の評価規準を明確にする

活動の評価基準を作る
(ループリック)
学習活動やその成果
を評価するための基準
コミュニケーションの
仕方やグループワーク
の進め方など、単純に
数値化できない事柄に
ついて評価を行うため
の視点と規準

子どもの主体的な学習も、教師のねらいのもとに行われることを押さえない。何を学習すべきかの「枠」を示すことができるのは、教師であり、枠も示さずに子どもに学習をまかせても、その学習は拡散し、子どもにとっても手応えのない学習経験となる。そこで、教師は指導に際して子どもに何をさせたいのか、どんな枠を与えるのか、自分の「指導目標」を明確化する必要がある。しかし、それは教師の目標であって、子どもの目標ではない。子どもが教師の指導目標を理解し、学習活動を効果的に行うようになるには、教師の次の準備が必要である。

- ・教材を分析して「指導目標」をはっきりさせる。→基ループリック
 - ・指導目標を子どもにとっての「学習目標」に翻案する。→単元ループリック
 - ・学習目標をさらにわかりやすい「学習問題」に翻案して子どもに与える（後には子どもと考える）。→実践ループリック
- 以上のような手順でループリック評価を取り入れていきたい。

(3) 見取りと評価のフィードバック

自ら判断・評価
・自分で考え、自分で
計画を立て、自分で評
価ができること
・さらにその活動が価
値ある者かを見抜く目
を持つこと

総合学習では、学習活動の自由度が高いことから、子ども自身が自ら判断・評価しながら行動することが要求される。

また、調べたことを発信することで、自分自身の学習成果に対する学習者自らの評価活動が行われることになる。この時に教師や他の生徒から与えられるフィードバックは、子どもの自己学習力を促す大切な情報になるだろう。